

コロナ禍と ジェンダー平等



平川 和子

東京フェミニストセラピィセンター所長

目黒区男女平等・共同参画センターで実施している
女性のための「こころの悩みなんでも相談」において、
女性のさまざまなこころの悩みの相談を受けている、
東京フェミニストセラピィセンター所長の平川和子さんに、
令和2年度の相談実績から見える
コロナ禍とジェンダー平等についてご考察いただきます。

令和2年が明けてから、新型コロナウイルス感染症が世界へ拡がり始め、現在に至っています。東京都では「ステイホーム」が呼びかけられて、当初は街行く人の波が消えました。また同年3月には突然、全国の小中高校が休校となり、続く4月には初めての緊急事態宣言が発出されました。4回目が発出された宣言が解除されたのは令和3年9月30日でした。およそ一年半ぶりに感染者数が減り、ようやくくまれた小康状態に、一息つくことができています。

しかし不安や恐怖がなくなったわけではありません。この間には感染した人たちが、入院先の病院で、あるいは自宅で治療を受けることなく亡くなるという、生命にかかわる深刻な事態も次々に起きました。また長引くコロナ禍が日常の暮らしや健康に及ぼす影響から、多くの人がさまざまな困難に直面しました。「令和3年版 自殺対策白書」によれば、令和2年における自殺者数は21,081人。このうち女性の自殺者数は7,026人に増加し、とりわけ働く女性たちが追い詰められている実態が明らかになりました。過去最多となった小中高校生や大学生の1,039人という数字に驚愕します。未成年者を含む、生きづらさを抱える女性たちの疲労困憊状態は限界まで達しています。有効な対策が必要です。区民の皆様から相談室に届く声からも同様の疲弊や社会的孤立を日々感じています。

